

---

# **とある転生の原子操作（メルトオペレーション）**

飯屋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】 とある転生の原子操作メルトオペレーション

### 【著者名】

ZZコード

飯屋

### 【あらすじ】

運命的な流れか、死とともに少年は『とある』世界に出現した。何故そこにあるのか、何故そうなったかはわからない状況でも少年は気楽に考える。そこで、予想外の『同類』と出会つとは思わずにして。そして、彼もまた物語に巻き込まれていく 転生＆原作介入あります。主人公は強くなる？予定です。ヒロインは・・・どうしましょ～皆さんの感想で決めましょうかね～

## 第一話・Dead and Alive(前書き)

初めまして！

ヒロイン不安定に定評のある飯屋と申します。  
このたび、以前から挑戦してみたかった転生ものについてに挑戦してみました。

とはいっても作者の妄想がモトとなつておりますので突っ込みどころが多いかもせんが、転生ものの「」といつ方、ぜひ読んでいただけたらと思っております…！

感想は参考にもしたいので出来たらすぐだ（�）

少し長いかもしませんが、なにとぞよろしくお願ひします。  
そこまでシリアルにする気は・・・ある？かも。  
気楽に読んでいただければいいかなあと思います。

それで、ヒロインは誰にしましょかな。

## 第一話・Dead and Alive

ある日、少年は怪死した。

少年は病気を持っていたわけでもなく、急に発病したわけでもなく、また大きな怪我一つしていない。

にも関わらず、少年は糸の切れた人形のようにその場に崩れこんだ。それもまるで心臓の部分だけ幽霊であったかのように、消滅して、だ。

だが、それは世界には無関係な出来事で今日も明日も明後日も明々後日も、時は続いていく。

歯車は回る。

あらゆる命をめぐらし合わせ、運命を廻らせていく。

そして、死んだその少年の運命もまた・・・・・・。

この世界の科学、の総本山にして超能力者すらも開発できる学生の街、学園都市。

230万人の人口の大半が学生だが、手入れが行き届いていたり風車も多かつたりクリーンな街である。

都市、と言つよりは国に近いこの学園都市のその四割方が能力者、つまりは超能力を使える人物だ。

そらばにその中の第七学区といふ中等教育機関を主にしていて、多くの学生や教師がすんでいる学区。

その中のそらばに中の路地裏を、一人の少年が歩いている。

「・・・（うーん・・・晩御飯、何にしようかな・・・）」

まるで上から染めたような真っ黒な髪に、整った顔立ち。

夏用の制服、つまりはカッターシャツを着ていて、腕には青色のリストバンドが巻かれていた。

そして彼は、スーパーなどで入れてもらえるポリエスチル製の袋（中から大根や葱が顔を出している）を右手に持っていた。

（・・・転生して最初に買い物・・・気楽なのかな・・・）

少年はカッターシャツ以外の姿ならマフラー必ず着用している変わ

り者であるが、性格が荒々しいなどといつてはいけない。

一見すると何もない学生に見えなくもないのだが、実の所はどこで  
もない事情でここにいる。

ここに、といひ言葉は世界を示している。

やつ、少年は本日転生を果たし、この世界に現出した存在な  
のだ。

(書庫<sup>パンク</sup>にもすでに俺の名前があつた・・・ある程度なら銀行に俺の  
金もあつた・・・何か、まだしつくつこないな)

少年の名は、  
てんのうじひびき  
天王寺響。

彼は俗に言われる前世<sup>しせい</sup>といつ世界で、怪死している。

理由はよくわからないが、運命的、つまりは定めのようなものだっ  
たと『何か』に教えられた。

『何か』という曖昧な表現をするのは、転生した際にあつた記憶に  
転生について誰かに教えられた記憶があつたからだ。

しかし、『何か』が誰か、まではわからない。

転生させられたのも、運命・・・・らしい。

神様が教えてくれたのかな、と気楽に響は思いつつ、路地裏から表の道路に出る。

暗いところから急に明るい場所に出たせいか、サンサンと降り注ぐ強い光が、響の目にしみる。

まず、彼は転生に気付くまで（というよりはそんな非・現実な出来事を認めるまで）かなり時間がかかった。

清掃ロボや超能力を見て、ようやく認めるに至ったわけだが、まだ受け止めきれない様子だ。

どうすれば、どこに行けば、どこに住めばいいかわからないまま道に迷つたせいで（キヨロキヨロと怪しげだったから）警備員に少し調べられた。

そのときに、幸いにも苦労せずに書庫（パンク）に自分の名前と入居する予定の寮、学校を確認できた。

そこには転校生扱いとなつていて、明日から櫛川中学校（三年生）に転校することになつていた。

（警備員の話から察するに連続虚空爆破事件が目立ち始めたころ・・・）

能力もまだ判明していない響にとって原作介入するかどうかは重大な問題だった。

( レベル低いと死ぬ・・・かもな )

自分といつ存在がいるだけでも、原作といつ本来のレールからはずれる。

つまり、この世界に響が来た時点から多少の変化を帶びた平行世界パラレルワールドになつてゐるであろうことだ。

( ・・・はあ、じつしたもんか・・・ )

割と広い歩道を歩きながら、周囲の様子を確認する。

ドラム缶のような形状をした清掃路口ボが行きかつていったり、風車があつたり、

道の隅では柄の悪い男がいたり、などと見るだけでも響にとって新鮮な空間であることが感じられる。

新しい生活が始まるんだな、とじつても考えてしまつ。

( えーっと・・・確か俺の寮は・・・樅川中学の近くだよな。 )

学生寮に入るのは初めてで、やはりじいか緊張している自分がいることに気付く。

響自身、料理は得意であるため食べることには心配はない様子だ。

( ・・・あ、・・・・・・・・・・・・・・・・ )

そこまでふと響は重大なことに気付く。

(・・・部屋の鍵がなかつた・・・)

どうやって寮に入る気だつたのだ？

自問自答しても答えは返つてこない。

とりあえず、鍵を取りにいくことにする。

転校してきたということになつてているからには、学生寮も学校が関係してくる・・・はずだ。

(生徒たぐさんいるだろうけど、先生に挨拶もしなきやな)

道がわからないため、ポケットから薄い端末を取り出す。

最新式の向こうの世界で流行つていた薄型の携帯端末を左手で操作し、地図を表示する。

柵川中学校と入力し、場所を確認する。

端末の見た目は前居た世界と大差ないが、中身の性能は比べるまでもなかつた。

地図も当然高性能で、今まで見づらかったものを使つていての響には十分すぎるくらいわかりやすかつた。

まだ学校があるためか、あたりの学生は思つたよりも少ない。

きつり整備された道を歩きながら、響は夏の暑さを体感する。

暑さは変わらないらしく、非常に飲み物が欲しくなる。

一応スーパーの袋にはドライアイスを布に包んで入れていたので食材はおそらく大丈夫だろう。

学校がある、といつても今日は土曜日であるため午前中授業だけのところが多いだろう。

ただいまの時刻は12時過ぎ。

早めの学校ならもう学校は終わっているだろう。

道の途中で、人が集まっている場所を響は見つけた。

(ん・・・・?)

何か店でもあるのかと期待してそちらに視線を移したが、違った。

人が集まっているというのは間違っては居ないが、その人たちは響から見て個性的だった。

学園都市名物の不良、というやつである。

基本、ここは何か悪いことでもおきているのではないかと警戒するものだが響には個性的な人物、にしか見えていないらしい。

転生する前の世界では、ああいう人物は普通に暮らしているとあまり見かけないからというのもあるのだが、暑さにやられている響の

脳内ではすぐには理解できなかつたようだ。

少し近寄つた響の目に、男たちに囲まれてゐる少女の姿が映つた。

(女の子？・・・！・・絡まれてるのか)

その少女には見覚えがあつた。ふんわりとしたライトブラウンでセミショートの髪に、常盤台の制服。

わんないきねほ  
湾内縄保。

白井黒子の級友で、水泳部員だつた少女だ。

レベル3の水流操作系だつたことも響は思い出す。

常盤台中学の授業が早めに終わつたから、外に出て絡めた・・といつたあたりだらう。

彼女の性格なら、能力で攻撃して迎撃しないことも納得できる。

主要ではないにしろ原作のキャラの一人をここで見ることになるとは思わなかつた。

(・・・・・)

ちなみに、響は喧嘩が強いわけではない。

しかもまだ能力が無い今、響はただの一般人に過ぎない。

(助けるか)

決断するのに、一秒もいらなかつた。

普通に歩いて不良の集まりに近寄るだけでなく、湾内の正面、つまりは集まりの真ん中に躍り出る。

「大丈夫か？」

不良たちがすこい形相でにらんでくるが、響は動かなかつた。

元々、響はこういう人間で、怖くともつらくとも、決めたことはやりとおす。

さらにいうならば、お人よしと呼ばれるものにもあてはまり、友達を作ることに苦労したことがないタイプだ。

そんな人間だからこそ、喧嘩に慣れていない。

少し涙ぐんでいる湾内は、驚いた様子で響を見る。

「え？ あ、貴方様は？ 一体・・・？」

「俺か？ 俺の名前は？」

天王寺響だ、と言おうとした時、不意に不良の一人が突っかかるよつにして集団からこちらへ踏み出してきた。

「何だ？ てめえ？ いきなり現れたと思つたら随分調子乗つた真似す

んじゃねえか。なあ」

不良の中では結構普通な姿をした男だった。

髪を染めているわけでもなければ、チャラチャラしたものもありつけていない。

ただ、ガタイは周囲の不良よりはよく、強面だ。

声も低く、ドスのきいたものだった。

「俺は怒られるよつなことはしないと黙つんだが」

響は店内を守るよつに立つと、その男と正面から立ち向む合つ。

改めて男の迫力がこじりこじりと伝わってきた。

周囲は困まれてゐるため、逃げる」とせまならない。

「……アンタ普通にしてたら、多分周囲のやつよりはモテるぞ？」

「冷静だね。相当な能力者だから?」

「いや、能力はない（怖い・・・）何？駒場はもつと怖いのか？・・・」

「まあいいや。度胸だけは褒めといてやるから、もつと歸れ、ガキ」

「その俺より年下に絡むお前らは口っこソンだな」

「調子のんなよーおーー。」

男は声を荒げた瞬間、地面を蹴つて突進するよつに響に殴りかかつてきた。

喧嘩に慣れているのか、重そつた拳を響の顔面田掛けて振るひ。

腕の太さからして、響がまともに相手に出来るとは思えない。

いやな予感がした響は首を思いつきり右に曲げる。

その真横を、拳が通り過ぎた。

「つおッ！？」

拳が通り過ぎた際の風圧が頬をなでる。

響が素早く重い一撃をかわせたのは偶然で、彼は心の中で安堵の息をもらしながらもすぐに後ろにいる湾内の手を掴んだ。

振り向かずに声だけで合図を送る。

「逃げるぞー。」

「は、はい！」

真横に居た不良の一人の顔に響はもう片方の手に持っていた買い物

袋を投げつけ、その隙に集団の輪から抜け出す。

買い物袋には大根やジャガイモも入っていたので、結構な重さがあったと思われる。

とつさにしてはよく動けた、と自己評価しながらも湾内を連れて走る。

後から追いかけている集団を見ながら、逃げている響は徐々に追いつかれつつある状況に焦りながらも路地裏に入る。

薄暗く、埃が多い道を二人は駆け抜ける。

彼の頭の中には、このまま曲がり角などを利用して逃げ切る、といったものだったが彼は忘れていた。

転生者である自分が、地理的な面において圧倒的なまでに不利だといつことを。

それこそ、先ほどのように端末で調べればいいのだが、その余裕もない。

「まだ走れるか！？」

「は、はい！」

湾内は水泳部だけあって、普通のお嬢様よりも体力があるらしい。

何度も角を曲がったが、あまり苦にせず走っている。

「ツ！」

ある角を曲がったところで、一人の足が急に止まつた。

そこには、大きく、口をさえぎる様に壁があつた。

すればビルの裏側にあたるらしく、塀のように乗り越えることも出来ない。

「行き止まり！？」

「そんな・・・」

他に道がないか探そうとした時だつた。

「へッ、残念でしたあ・・・」

「手間かけさせやがつて、サンドバックぐらいにはなつてくれるよなあ？」

二人は追つてきた不良の集団に取り囲まれた。

「ツ・・・・（不味い・・・）」

ジリジリと近寄つてくる集団を前に、響は湾内を自分の後ろに立たせ、警戒する。

先ほどのようなアクションはもつ出来ない。

転生早々かよ、と響は呆れたようにため息をつく。

どうしようかな、と次の行動を考えてたその時、響から見て奥、不良たちの集団の後方にいた不良の一人が力なく崩れた。

「おい！？」

「「ー！？」」

急なことに驚きを隠せない一人が、音もなく地面にひっくりかえった。

不良たちの意識が、後方に向けられる。

(・・・アレって・・・もしかして)

響は、原作知識があるため、この現象を知っている。

「・・・お怪我はありませんのー！？」

「・・・あ、ああ・・・」

ザワザワとあたりを警戒する不良の前、つまりは響と湾内の前にシンテールの少女が現れる。

響も、原作人物が目の前に現れたことに驚愕していた。

白井黒子。

学園都市に数少ない空間移動能力者の一人の上、自称御坂美琴の露

テレポータ

拠にして治安維持機関風紀委員に所属している変態大能力者の少女。

何も無かつた空間に突然現れ、それを普通としている少女に、数秒送れて不良が気付く。

そんな不良たちに向き直り、白井は腕に巻かれた緑色を主とした風紀委員の腕章を見せ付ける。

「風紀委員、ですの！」

「助かつた、サンキューな（・・・予想以上に・・・強つ）」

風紀委員第一七七支部まで（事情聴取のために）移動した響は白井を前に笑顔で礼を告げる。

風紀委員第一七七支部の中身は、学生が居座るような空間というよりは、病院や会社といった事務室的なつくりで、そんな部屋には山のように資料が置かれている。

また、今でも情報が届いてきているのか、誰も使っていないパソコンもずっと作動中だつた。

慣れるまでは息がつまりそう、と響は感じた。

味気ない机や、椅子が多い中、テーブルを挟んで響と白井はソファに座つて向かい合わせになつてゐる。

「申し送れましたが、わたくしは白井黒子と申しますの。

天王寺さん……でしたっけ？？？貴方のおかげで、湾内さん

が無事でした。感謝いたしますわ」

「いや、俺は何もしてないさ。結局、怖い目にあわしちまった

「いえ、彼女も感謝していましたわよ？友人としてお礼でもしたいのですが……」

「そう言つてもらえると助かる。俺、ここにきたばかりだからさ。自分で言いたかねえけどまだ右も左もわからないんだ」

「転校生ですか？こんな時期に……びこの学校へ？」

「柵川中学校だ」

響の言葉に、同じ部屋でずっとパソコンに向かい合っていた少女は何かに気がついた様子で椅子から立ち上がり、二人のいるほうへ歩いてきた。

頭に花飾りがあり、まだ顔に幼さを残したかわいらしい少女は一人の近くまでくると二人の話に乗る形で入ってくる。

「私も同じ柵川中学です。あつーわ、私は初春飾利つていいます。  
白井さんと同じ、ジャッジメント風紀委員です！」

(一)

初春飾利。

ある意味、これほど他と見間違える人物はいないかも知れないくらい、頭の上に乗っけている花飾りは目立つていて、頭の花飾りは何故だか無性にむしりとりたくなるものだった。

造花であるらしいのだが、よく出来ていることは領けた。

「俺は天王寺響、白井も天王寺じゃ長いだらうから響でいい」

「やうですか」では響さんと呼ばせてもらいますね？ そう言えば、どこから転校してきたんですか？」

「（世界の）外からだ」

「なるほど（学園都市の外から、とは）また珍しいですね～。大丈夫ですよ！ 私たちが出来る限り力になりますから…困った時はいつでも頼つてください…！」

初春はあまり厚みのない胸を張り、えへん、と自身満々で言い切る初春。

「ヤ！」までは頼れませんの」

「し、白井さん…！ 何言つてるんですか！ 私だつて問題の一つか二つ！ パパッと解決しちゃいますよ！ つていうかしてみせますよ…」

一人のやり取りについ口元が緩む。

二人はそのまま激しい？ 討論にまで発展し、響を置いてけぼりにしていた。

暇になつた響は、ソファにもたれかかるように後に倒れよつとする。

その時、不意に声をかけられる。

「 隨分と女に囲まれているわね」

「 !?」

少し大人びてしつかりとした口調に、響は驚いた。

ビクッ、と肩を震わせて前のめりの姿勢になり、目の前のテーブルに額をぶつける。

その衝撃で少しテーブルがゆれ、テーブルの上においてあつたコップが倒れかけたが気にしない。

だが、響に声をかけた人物は響の横に出ると改めて口を開く。

「お久しぶり、とでも言つべきかしら？響」

声の主は、茶色く、クセ毛のない綺麗なロングに幼さと大人びた二つの感じを漂わせる顔立ちでビコトなく優雅を感じさせる雰囲気の少女だった。

・・・ 誰だ ?

(いや、違う……俺は「ノイツを知っている）

響の脳が、この少女について考えようとした瞬間から痛みを発しました。

とくに騒ぐほどでもないが、脳内の血液が重くなつた氣もした。

（何だ？頭の奥にファイルターが出来た感じ……）  
・・・・・

「……やつぱりこうなつたわね。……お前に残念な脳に簡単に説明するなら『私たちのような存在』は前いた場所の人間に忘れ去られるものの。理屈云々は私もわからないけど、何故だか私はそういう説明が頭にすり込まれてる……じゃあ今度は私に関してのヒントよ。……貴方の身近で、一年前に怪死した人間の名前は？今の、じつにきた貴方なら思い出せるはずよ」

「『私たちのような』？……存在？怪死？……お前、まさか『ゾンビ』！？ツ！！？（言葉にノイズが…）」

「いいから考えてなさい」

少女の言葉に、困惑しながらも必死に記憶を辿る響。

怪死？一年前？

（…………ツ！…………外傷もないし病気もないのに死んだやつを、知ってる？…………まさかツ）

ピキーンツー！と頭の中で何かが砕けたような気がした。

それを境に、その人物に関しての、少女に関しての記憶が文字通り響の頭になだれ込む。

痛みは治まつたがあまりにも情報が多く脳に負荷がかかったためか、目眩がした。

「…………橘 藍」  
たちばなあい

そり、前世で、転生前の世界での幼馴染の少女の名を響せようやく思い出せた。

二年前、糸の切れた人形のように倒れ、医者や家族の前で文字通り脳が跡形もなく消滅して死んだとされる少女でプライドが高かつたのは変わっていないが、性格は響の知っているものとは違った。

名前を呼ばれた藍はニヤリと怪しげな笑みを浮かべると、響のそばにより、ソファに腰を下ろす。

「じぶ答。お前にしてはよく考えたわ」

「性格は変わりすぎだろ！？何だその女王様キャラ……といつより魔王キャラ」

「風紀委員よ……そっちは何？ここにきて早々女の子に絡んで…。  
・。一級フラグ建築士にでもなるつもり？」

「なんですか。じぶは最初から不幸な目にあつただけだってのに…。

・

「・・・最初の一言が一級フラグ建築士ね（上条さんとは違う人だけ）・・・）・・・はあ・・・」

「？」

呆れる藍を見て、首を傾げる響。

そこに論争に負け、精神がボロボロになつた状態の初春がやつてくれる。

「響さんあ～ん・・・白井さんひどいですよお～・・・。  
つていうか響さんつて橘先輩と知り合いだつたんですね！何話して  
たか知りませんけど、仲よさげでしたし」

「切り替わり早ツ！」

初春は『とりあえず、ちょっと資料まとめてきますね』などと言  
いながらパソコンのほうに向かった。

横にいた藍も、その言葉につられた様にソファから立ち上がり別の  
机に座り、パソコンと向き合つ。

白井は何故かいない。

一人することもなく待たされることになつた響は、両腕を頭の後ろ  
で組んでソファに寝転ぶ。

簡易な見た目に反して、全般的にフカフカだった。

(「ん？ そもそも、俺、何しようとしてたんだ……？」)

「まあ、ならながらクーラーのきこてこむ」の部屋で静かに考える。

確かに、湾内を助けようとして……。

……その前は。

……。

……………あ…………。

しばらく続く沈黙の間、ボーッとしていた響はあることを思い出す。

（……寮に向かつてたんだった！……つていうか鍵！）

「私がついてきてやつたことを光栄に思えて？」

「ローラ＝スチュワートみたいな口調になつてやがる……まあ、同じような境遇がいるのは助かるけど……」

「よひしー。お前は素直でよくぞ！」

うれしくないなあ、と呟きつつ響は歩きながら疲れたように頭に手をやつた。

「」は樋川中学の廊下で、響と藍の一人は職員室に向かつて足を進

めていた。

流石学園都市といいたいくらい、前世の学校よりは綺麗な、といつよりも清楚なものだった。

藍の制服と態度と話から、といつより説明をうけてのものだが藍もこの学校の生徒らしい。

この学校も先ほど授業を終えたよう

響の横にいる彼女が廊下で歩いていくたびにすれ違った生徒はちらりと注目していた。

性格上、目立つても仕方ないと響は思つてしまつ。

(・・・それにしても、コイツが風紀委員かあ・・・)

・・・ものすごく不安だ。

「今余計なことを考へたわね?」

「いや、違います。つてそれよりも一つ聞いてもいいか?」

「素直なので許可するわ」

ここで、響は最初に考へていた悩みの元を尋ねることにする。

学園都市に彼女が先に来ていて、しかも風紀委員にまでなつていたということはあらかじめ何かを持つていることぐらいは簡単に想像が出来たからだ。

「お前の能力って何?」

「そうね。言ってなかつた? 大能力者の発火能力よ。<sup>レベル4</sup> 実質超能力者  
ぐらいの力は持っているのだけど、脳ある鷹は爪隠す・・口ネで隠  
させて貰つたわ」

怪しげな笑みのまま得意げにそう言い放つ藍。

いちいち発言のたびに怪しげなことを言ひ藍に響は疲れたようにため息をつく。

「お前に炎、か。逆らつたら跡形もなくなりそつだ。つていうか似  
合わない似合わない」

「ほう、私は『紅蓮の女王』というイメージ的にぴったり思つてい  
るわ

「その某少年雑誌の漫画ネタ、何人に通じるんだ・・・。それでも  
イメージとは合わないぞ」

「まあ、フレデリカよりは私のほうがふくらみがあつてよ」

「腹に、か?」

「胸に、よ」

言葉とともに藍の拳が響の顔面に横から入る。

「ゴン、と軽い仕草ながらも痛い一撃だった。

「ぶふおッ！？暴力はないだろ」

「氣のせこよ」

からりと否定してスタスターと先に進む藍。

絶対風紀委員に向いていないうつ、「心の中で突っ込みながら響もそれを追いかける。

疲れた様子でも響はこれから通り学校を見渡しながら進む。

慣れる為に校舎内を周つてから職員室に向かおうといつ、何とも藍の優しい（藍曰く）優しい提案だった。

ひつてしまはるべく校舎内を見て回つた響は、職員室の前で立ち止まつた。

基本的に生徒が入ることを少し意識してしまつ教師の聖域の扉を、藍は自ら家のよつな氣軽さで開いた。

そして振り返りつつ、響に指で職員室の中を指差しながら言つ。

「とりあえず、先生に挨拶ぐらいはすませてきなさい。私は先に帰るわ」

「・・・・・・・・・・・・・・やつわせていただきます

この後、無事に鍵を手に入れた少年は不良に絡まれたり、落ちていたバナナの皮をふんで階段から転げ落ちたり、買った肉まんの中に

具が入つていなかつたりなどとこの世界からの様々な祝福を受けて、寮にたどりつくことになる。

## 第一話・Dead and Alive(後書き)

バーロー！主人公気楽過ぎるだろwwwとまあこれは自分の感想です。

## 第一話・Get ability level? (前書き)

うーん、オリ主よりもオリキャラ橘藍のほうが目立ってる気がしなくもないですが…。  
まあ、いいよね(笑)

個性が出てるってことでよろしくお願いします。

後書きで主人公の能力説明があります。

・・・主人公とか橘藍の説明・・・いりますかね? w

## 第一話・Get ability level ?

ある少年が学生寮によびやくたどり着いた次の日の朝。

食材や衣服以外の私物はなく、ベッドにタンスや棚そして机ほどしか家具がなく、タンスの中や棚もすっからかんで生活感にかけている部屋の中。

最初から設置されていたクーラーによりキンキンに冷えたその部屋の中で、今日から新しい学園生活を過ごす少年、天王寺響は目を覚ました。

基本的に朝が得意ではない上に転生したり不良に絡まれたりして昨日色々あつた彼は、ベッドの上で身を起こしたまま数分間ボーッとしていた。

前世で女子にも指摘されたことがある特徴的なまでの真っ黒な髪は相変わらず乱れてすらいない。

(・・・頭が、痛い・・・)

頭を抑え、しばらく微動だにしなかった響は、枕元にある携帯端末に手を伸ばした。

薄くタッチ機能がついた携帯端末の画面に表示された時刻は、本来登校するにあたって起きなければならない時刻をとうに越していた。まだ脳が十分に動いていない響は、数秒間それを見つめながらじつとしていた。

だが、流石に脳が動き始めた数秒後、電撃につたれたようご彼は目を見開いて驚いた。

( やばッ！－！？「転校生が遅刻とかありえないだろーーー」 )

彼は転がるような勢いでベッドから降り、その勢いで服を制服に着替え、机にあつた青いリストバンドを右手首につける。

そのままビューン！とでも効果音がつけられるぐらーーのスピードで台所を駆け巡り、朝食のしたく、洗い忘れてたものの片付け、を済まし、そのまま居間へ。

そこで猛スピードで朝食をとつ、食器を片付けるとベッドに立てかけてあつた鞄を持つとそのまま玄関へ、外へとかけていく。

衣服等の着替え、歯磨きを（手抜きなしで）一分。

その他におよそ七分かけて彼は家を後にした。

( いけるー間に合つ間に合つーーー )

危機に瀕した際の人間の底力に感動しながら、響は寮から離れ、鞄にこつそり（ではない）入れてきた学園都市製の折りたたみ式スケートボードに乗り、さらなるスピードで通学路を駆け抜けた。

某名探偵のようなターボエンジン付きではないにしき、学園都市の道路の整備は行き届いており滑りやすいだけでなく、学園都市製といつことである程度の速度は出せた。

昨日何故か店で田にとまつたものを購入していく助かつた、と彼は思ひ。

(ふう・・・)の世界のあの学生なら、不幸なことに見舞わ  
れて遅刻するんだろう(ナ)ど俺は生憎不幸体質じゃあないからな)

ジャッジメント アンチスキル  
風紀委員や警備員に見つかれば即効反省文だろうが、今はおかまい

なしだつた。

近道とばかりに階段を真ん中に設置されている手すりに乗る(ヒ)で、  
器用に滑り降りる。

そして器用にスケートボードの後方を振るようにして勢いを殺さず  
に、曲がり角を曲がった瞬間だった。

(なツ)

視界にツンツン頭の少年がドアップで映る。

叫びたいところだが、響は驚いて声が出なかつた。

(おこおこ)

響が見間違えるはずがない。前世、原作を読んでいる中で見慣れた  
あの人物を。

しかしこのスピードモードの状況もビリビリも出来ない響はそのまま、  
突っ込む。

「ん?」

黒髪ツンツン頭の少年も、いさりげに気がついたように振り返ったが、もう遅い。

とつやに動じ、いつ出来たのは驚嘆に値するものなのだが、それも無意味に終わる。

悲鳴にも雄たけびにもとれる奇声を発しながら、黒髪ツンツン頭と  
真っ黒髪普通頭が衝突した。

「ゴツーーー」とすさまじい音が鳴り、スケートボードと一緒に響の体が宙を舞う。

一秒ほど宙を舞つた彼は幸い背中から地面に落ちたために、大怪我はしなかつたわけだが激突した際の激痛に襲われ頭を抑えてうずくまる。

対してそれとぶつかつたツンツン頭の少年は地面に転がり、声をあげることも出来ない激痛に襲われてもがいていた。

当然、数分間は一人ともその場で激痛と闘っていたわけなのだが・。

「ちッ、遅刻……してたまるか！」

シンシン頭の少年と響は同時に起き上がり、お互いぶつかった相手に気がついた。

二人とも激痛と鬪っていたためか、ぶつかった事実はもう遠い過去のように思つており、ぶつかったことを思い出すのに数秒かかった。

「ツー、めんなさい！俺の注意不足です！！」

高速で頭を下げる、田の前の少年に謝罪する響に、田の前の少年は頭をかきながら言つた。

「事故なんだから、謝らないでくれって。ええ、ツと・・俺なら大丈夫だから。この程度、不幸でも何でもないし」

「『めん。俺、ここにきたばっかでテンパッて・・・って不幸？』

何故そんなことを言うかわかつていながら、響は不幸という言葉に首をかしげた。

初対面らしく振舞うためでもある。

「いや、大丈夫だつて。まあつまり上条さんはこの程度のことではもはや動じないんですよ。つてここに来たばかりなのか？」

「まあ、昨日この街に来たばかりだから、何もわからないんだ」

「珍しいな。ま、困つたことがあつたら俺に言つてくれよ。俺にも何か手伝えるかもしない・・つて自己紹介まだだつたな。俺は上条当麻だ。よろしくな」

「（人が良すぎる・・・）俺は天王寺響。こちらよりよろしくな」

「携帯持つてるか？番号とか伝えとくから、何かあつたら相談してくれよ」

そう言いつつ、上条はポケットから携帯電話を取り出し、番号などの情報を送信する準備をする。

想像以上の上条のお人好し度に驚愕しながらも、響も薄型の端末を取り出し、連絡先を互いに交換する。

響のこの世界に来てからの電話相手のリストに、四人目（その他：橘藍、白井黒子、初春飾利）の名前が記入された。

転生前の友達のアドレス等は一応とつてあるが、それはあくまで思い出ようでしかない。

（・・・しかし、なんて個性の強いやつばかりなんだ・・・）

機能の電話帳を開き、こちりで登録したメンバーを確認しながら響は心の中で呟く。

「ありがとな、助かる」

「いいでいいって俺も世話になるかもしないしさ・・・って・・・  
・・・

「「あ、」」

だが、上条と響は二人は携帯に表示された時間を見ること、これがついた。

二人は再び顔を合わせ、お互い理由を即座に把握。

「やべ、遅刻するーー！」

そして一人は慌てた様子でそれぞれの学校に向かい、走り出した。

もちろん、響はスケートボードを拾い上げてから、である。

「元氣そうで何よりです・・・あ、あははは

「せえツせえツせえツせえ・・す、いませ、ん」

「え、いや遅刻してないわよーー？」

「よ、よかつた・・・」

柵川中学校の廊下で、響は教師を前に膝から崩れ落ちた。

実はあれからといつもの、響は全力で走り抜けてここまでたどり着いたのだ。

最後には校門を通らずに壁をよじ登るなど無茶はしたが何とか遅刻は免れたらしく、安心のあまり全身から力が抜けたようだ。

そんな響を前にオロオロしている黒髪ショートヘアの女教師は、響が転入するクラスの担任である。

「で、では先に教室に入りますので、呼ばいたら入ってきてくれださいね？」

「わかり、ました」

ガラツと教室の扉を開き、中に入つていく教師の背を響は見送った。  
(身だしなみくらいは今のうちに整えとかないとな)

ゆっくりと体を起こし、制服の乱れを確認、なおすと暫く教室のドアの前で立ち尽くしていた。

(挨拶はありきたりでいいよな)

そして、教室の内から歓声とともに教師の声が聞こえた。

「では転校生の入場だーい」

響は声とともに教室のドアをゆっくりと開けた。

同時に、教室内の視線が響に集中する。

(うーーー・緊張するーー)

やや緊張した様子で教壇に乗り、教卓の真横で立ち止まり、教室の生徒のほうに向き直る。

いつの時代も、どこの世界も転校生は非日常的な存在の象徴で、生徒たちからすれば立派なイベントなのだ。

転入してきた側からすれば、迷惑な話なのだが・・・。

「これからこのクラスです」とことになる天王寺響……です。  
趣味は……えっと」

「天王寺響 基本リストバンドやマフラーを着用している変人、  
趣味は料理の研究に剣道。特徴は上から染めてそうな真っ黒クロス  
ケな髪に大がつくほどお人好し……つてところかしら?」

「……………  
……………は?」

一瞬横から飛んできた説明に、響だけでなくクラスが静まり返った。

だが、ただ驚いているだけの響とは違い、クラスメイト達は全員その説明をした人物に尊敬のまなざしを向けている。

そんなまなざしを向けられている人物を見て、響は妙に納得気味で意氣消沈した。

(……………藍……………)  
・ああ、俺は上条さんじゃないけど……不幸だ……

得意げな顔で大人な雰囲気を出している橋藍は、響と目があつた一瞬だけ怪しげに微笑むと視線を逸らした。

(予想通り、といふか予感どおりといふか……)

（どうやら彼女はこのクラスにおける頂点みたいなものだらう。

クラスの中から『流石橘様、完璧な情報網だぜ?』とか『戸惑つて

る転校生に救いの手を差し伸べるなんて優しく、みたいなものが聞こえてくる。

「どうやら、完全にカリスマスキルを発揮していたようだ。

（ああ、こういう奴だったなあ・・・）

新しい生活に期待していた節があつたが、それも一瞬にして自分と同じ境遇のものによって打ち砕かれ、ガラガラと崩れしていくのを響はを感じた。

「・・・・・・・・・・・・」

「はい 天王寺君は橘さんの後の席が空いてるから、そこに座つてくださいね～・・・・・とその前に身体検査受けてください。システムスキャンまず保健室は・・わかりますよね？」

「わかります・・・・畜生。ふ、不幸だ・・・」

教師の指示通り、とりあえず能力を測定しつかれきった顔で教室を後にする響だった。

色々な装置を行き来して脳を開発された響は、頭にかつてないほどの違和感を覚えながら色々な検査を受けていた。

白く立方体の装置を相手に、飛ぶようにイメージしたり、教師が持つていてるカードの表の柄（響からは見えない）を当てる、といったような原作でもよく見られた検査などだった。

それでも能力に関してまだ判明していないのか、響は次々別の検査を受けさせられ、今現在学校のプールにいるが・・・。

（はあ・・・何をしていいのやら・・・）

先ほど偶然触れた金属がさび付いたことをきっかけに、教師陣が何処かと連絡を取り合って何か騒いでいる。

よくわからないが、能力の種類を学者と一緒にしぼっていると考えるのが妥当だわい。

しばらくしてから、教師陣はこちらへやつてくると、そのうちの一人が響に向けて言つ。

「君の能力がどの系統かわかつた。君の能力は電撃も放てるし、氷や水も扱える。物質の構造や把握、結合、分解のほうが長けているがな。・・・さて、ここにある特殊なコーティングが施された機器に、高密度のエネルギーを思い浮かんだイメージ通りに叩き込んでくれ。何度も試してくれてもかまわない」

目の前に出された機器は、先ほどの四角い測定器より、2・3周り大きかった。

見るからに頑丈そうなそれはプールに沈んでいて、響は静かに目をつぶり、考える。

少しずつ、時折顔を出す『自分だけの現実』。それを確実に見つけて引きずり出す。

(・・・・・構造、把握・・組み換え・・・結合・・・分解?・・・・)

自然と頭に浮かんでくる言葉を、イメージと結び付けるべく正体を模索する。

(・・・ベクトル?いや、違う。電気?違う・・・けど・・・近い?)

ほんの少し、脳の奥にしびれが感じられた。

電流がかすかの走ったような感覚に、手こたえを感じた気がした。

それを頼りに、響は『パーソナルリアリティ自分だけの現実』をさらに模索する。

(電子・・・ツ!・・・かなり近い!?)それを念む・・・・・そうか)

脳の奥で徐々にもやもやしていた違和感の塊が安定していくような感じがした。

イメージが液体となつて脳に浸透しているのかも知れないと錯覚すらしそうだ。

(原子!)

右手を前に突き出し、田を見開き、響は前に突き出している右手の手の平に意識を集中させた。

(原子の構造や原子の内部の電子や核を操つたり、その原子の性質に携わる現象を巻き起こす、それが俺の能力！)

(・・・核融合レベルのエネルギーなら、あの物質だつて跡形も無く吹き飛ばせる)

ふしぎな感じだった。

意識を集中させ、イメージ（演算）するだけで響の体からじつそり体力が抜き取られていく。

脳がいつの間にかかなりの働きをしていることに気がつくが、下手に気にして演算とやらの邪魔をするわけにはいかない。

(・・・・Hエネルギーを制御、・・・・)

響の手のひら数ミリ前に、オレンジ色の球体が出来あがった。

徐々に膨れ上がるうとするそのエネルギー体を響は手のひらサイズの大きさでとどめたまま、次の演算を行つ。

(エネルギー体の照準を設定、爆発量を最低限に制御、自身への熱エネルギーを遮断・・・ツ・・・)

かなり高度な演算がいくつも折り重なっているからなのか、響は初めての能力使用に手間取っていた。

教師は近寄りたいが、暴走の不安もあり、近づけないで心配そうに響を見ている。

だが、響はそんな教師陣を置いてプールに沈んでいる四角い機器を睨みつける。

(・・・いけー！)

そして、彼は右腕に左手を添えるようにして構えた。

「いけー！」

直後、オレンジ色の高密度のエネルギー体が光線となつて響の手から放たれた。

オレンジ色の光線は正確に水の中の四角い機器に直撃し、機器を容赦なく貫く。

同時に、突然高密度のエネルギーを受けた水が水蒸気爆発のようなものを起こし、残った水も真上に吹き飛んだ。

噴水といつよりも間欠泉と例えたほうがいいかもしれない光景だった。

数秒送れて雨のよつに降つてくる残りの水も、熱湯と化している。

「熱つ！？・・・やりすぎたかな？」

当然、プールの中はクレーターが出来ていてボロボロ、プールサイドもじつじつとした瓦礫の山と化しており、けが人が出なかつたのが奇跡だつたかもしれない。

沈黙が周囲を覆つて居た中、響の真横に置かれていた白く立方体の測定機器は無機質な音で響の能力を測定する。

『記録　エネルギー射出速度、秒速11100m。演算時間、10秒。構造把握時間0・8秒　　総合評価：レベル5』

「・・・」

「・・・」

思わず、響だけでなく周囲にいた教師陣までもが驚愕のあまり声が出なくなつた。

確かにこれだとレベルが高くなると思っていたが、学園都市にも数人しか居ない中に入れるとは夢にも思わなかつたからだ。

原作を読みながらレベル5つて大変だろうなーなどて言つていたが、まさか自分がそうなるとは思つてもいなかつた。

教師の一部は感動しているようだが、響には達成感よりもやつてしまつたという罪悪感が強かつたらしい。

一人廃墟と化したプールを見て、青ざめながら呟く。

「これ……弁償……しなきや……駄目?」

「馬鹿ね……しなくてもいいに決まってるじゃない。一々そんなことを相談するなんて、馬鹿の極みね」

「反論できません……」

「それにしても原子操作マルトオペレーション……ね。流石の私でも隠蔽は出来ないわよ?」

「え、?なんでさ」

「私の能力自体は珍しくないの。ただレベルが高かつただけ。でもお前のその能力は規模が大きい上、珍しいのよ。第二位は別として、<sup>レベル5</sup>超能力者を物理と化学に一分した場合、お前のそれは明らかに化学の最高峰の能力もあるのよ?」

何処か楽しそうに笑みを浮かべている藍を前に、響は疲れた様子で机にうつ伏せになる。

「」は教室で、すでに授業は終わり、HRも終えたと「」は、皆荷物を整理するなど帰る準備を進めていた。

すでに荷物を整理し終わっていた響は藍が教科書を鞄に入れ終えたのを確認すると、立ち上がり、鞄を持つと藍と並ぶ形で教室を出た。藍の横を歩くだけでも周囲からザワザワ騒がれるが、もはや響は気にしていない。

すでにこの学校唯一の超能力者として騒がれていることもあるかもしない。

「結局、このよしな騒がしさに慣れてしまうしかないのだ。

「・・・は・・・・。お前、ジャッジメント風紀委員じゃなかつたっけ？」

「やうね。お前の思うどおり、私は今日は非番であつてよ

「おこおこ、それでも今つてあの事件の真つ最中だろー?調べなくていいのかよ?」

「結果は変わらないわ。ってやうね。一応支部には行くわよ?非番といつても緊急事態だからね」

下駄箱で響と藍は靴を履き替え、校庭に出る。

今日は昨日ほどは暑くないため、一人とも田差しが少し涼しげ感じただけでこれといった仕草はしなかった。

周りの視線を気にしない様子で一人は足を進める。

そんな一人に、見たことのある少女が駆け寄ってきた。

頭に花飾りを乗せた腹黒少女、初春飾利である。

「昨日ぶりです！響さんに橘先輩！これからどうなり？？」

「貴方だつてこれから調査でしょ？これから支部に行くといいよ」

「じゃあ響さんは？」

「ああ、俺も『コイツの調査に手伝える』ことがないかなあ、って感じだ」

「ええッ！？いいんですか！？今噂の超能力者（ペルル）が手伝ってくれるなんて感激です！それにしてもお一人とも随分噂になつてますね～。なんとも、橘嬢には恋人が居た、とか何とか・・・」

初春の何気ない質問に、肩を落としたのは響ではなく藍だった。

響は響で呆れたようにため息をついている。

「愚かな考え方。一体どう考えればそつなるのか、脳みそをばらして調べてみたくなるわ・・・。こんな変人、初春にくれてやるわ」

「・・・地味に傷ついた・・・・」

「仕方ないですよ響さん。その切れ味が橘先輩の持ち味ですからね。大丈夫ですよ！響さんも内面はあんまり知りませんけど、見た目は

いいですから…」

「……褒められてるのか?」「これ

初春の追撃でさうに精神的疲労が重なる響。

初春にも悪気はないのか、キヨトンとした顔で頃垂れる響を見ている。

(ん?)

相変わらずの幼さが目立つかわいらしい顔の横から響は、初春に近づいてくる少女を見つけた。

黒くて長い髪、頭に花の髪留めとくれば響にはそれがもう誰だかわかつた。

心の中でその名前を呟こつとしたときには、すでにその少女は初春の真後ろに屈て……。

あれ、このパターンつてどこかで……。

「うーいはーるーーん」

バサアツー…といつ音とともに初春のスカートが大きくめくれあがつた。

とつたのことで響も初春も反応できず、響は硬直、初春は驚いていた。

る。

フワリ、とスカートがめくれ、響の視界に白い物体が

「何申」のパンツ見ようとしてるのよ。ケダモノ」

映りかけた瞬間にドゴオッ！…と響の後頭部に藍の裏拳が叩き込まれた。

「ひやあツ！？佐天さん！？やめてくださいって・・・つて！大丈夫ですか！？響さん！？！」

あれ？う、初春！？こうなる予定じゃなかつたんだけど！？」

一・・・力オスね」

黒く長い髪の少女、佐天涙子もこうなることを予想できなかつたのかオロオロしていた。

涙目ながらも顔を上げた響は、何とか痛みに耐えながらも口を開く。

「えっと・・・転校生の天王寺響・・・です。天王寺って言いづらいから響でいい」

「え！？あつ！私は初春の親友の佐天涙子です！つてことは響さんが尊の超能力者！？ハツ！？それに橘先輩！？何故ここに！？もしかしてあの尊は本当だつたんですかー！？」

「貴方も相変わらずで何よりだわ・・・」

心の底から呆れたようにため息をつく藍。

そんな藍を見て、初春が誤解を解くために佐天に説明をしてくれた。

このあたり、気遣いが結構あるやつなんだな、と響は再確認する。  
と、それもいいが、周囲の視線がさきほじりながら釘付けになっていた。

佐天のせいでもあるだろうが、元々立っていたのは自分たちなので響は驚かない。

だが、佐天や初春は目立つことになれて（割り切れて）いないだろう。

恥をかかすのも気が引けたので状況を伝えてみるべく響は口を開く。

「・・・それより、さつきから俺たち、立ってるんじゃないかな？」

「・・・」

「わうね。ここでしゃべるのもなんだし、とりあえず支部へ行きました」



## 第一話・Get ability level? (後書き)

（主人公の能力説明）

- ・原子操作メルトオペレーション

名の通り、原子を操る能力。

原子を操る、といつても原子の把握に長けていため触れた物質の分解したり、結合したりするのが得意。

物質内の原子の構造（組み合わせ）をいじくり、氷や水を生み出したりすることも出来るが膨大な演算が必要なためにあまり多用は出来ない。

原子を操る、とあるが、内部にある原子核や電子をいじくることも出来るため高密度なエネルギー体や電撃を生成、射出することも可能だがかなり体力が削られる。

操る対象である『原子』という概念が広く適用されている曖昧な能力。

## 第二話・saunter

「初春、御坂美琴がもうじき来るらしいわよ?」

「うなんですか?じゃあお茶でも入れとかないといけませんね~」

「初春・・お姉さまを迎えるのはいいのですけど、今の事件の状況をわかつて言っていますの? そう言えば、響さんはお姉さまと会うのは初めてでしたわね?」

「ああ、そうだ。御坂美琴つて『あの』・・学園都市第三位の超電磁砲御坂美琴か?」

「他に誰がいるといふのよ・・・」

原作知識がありながらも初対面を装つべくとほけていた天王寺響は、ただいま風紀委員第一七七支部で橘藍、初春飾利、白井黒子、佐天涙子とともに連続虚空爆破事件について調べていた。

響の能力のレベルについては初春や佐天のせいで白井に知られてしまっている。

調べているといつても初春がパソコンでなにやら調べ」としてい る後で、三人が立っているだけなのだが・・・。

立っているのもだるくなってきたのか、すでに藍は付近から使われていなかつた椅子を持ってきて腰をかけていた。

茶色く長いしなやかな髪を右手で払いながら、彼女は面倒臭そうに

目を細めると

「くれぐれも言つておくけれども、御坂さんと能力対決・・・すればどうなるかはわかつて？」

「どうしたんだよ？俺はそんなことする気ないの知つてるだろ？」

「いえ、その・・・非常に言つらいのですが・・・」

「ですよね・・・その御坂さんは何というか・・・」

「そういうのが大好きというか・・・その・・・」

藍の言葉の意味を知つてか、響に白井、初春、佐天は氣まずそうに続けて説明していく。

だが、言いづらいため最後あたりはつきりと言わない三人を見かねて、再び藍が口を開く。

「要するに狂戦士バーサーカーつてやつよ。戦闘狂でもいいかしら？そんな彼女とお前が戦つたらどうなるかなんてもはや言わないでもわかっていて？」

「なんでさ。俺が戦わなかつたらいいだけだろ？大体、俺なんかがその御坂に目をつけられることはないって・・・」

心中で響が『それに御坂に目をつけられるのは上条さんだけだろ？』と思つて『』とも見透かしたような目で、藍は不機嫌そうに目を細める。

「・・・一々その無自覚な口癖、腹が立つわね」

「口癖?」

「一之介の話よ」

尋ねてきた佐天の質問に、適当に答えつつ藍は、入り口の向こう側からするかすかな足音（走っているためか藍には聞こえた）を聞いて呆れたように再び目を細め、ため息をついた。

その仕草に気付いた初春や白井は顔を上げて、支部の入り口のほうへ目をやった。

それからほんの数秒間、沈黙が続いたかと思うと、何の拍子もなく突然電子ロックのかかっていたはずの入り口の扉が電子音を発しながら開いた。

「黒子ー手伝いにきたよ」

入ってきた人物に、その場に居た中で唯一響だけが驚いた。

常盤台中学の制服に茶髪ショートヘアー、そして何よりも目立つのはこの電子ロックされた扉を簡単に解除してくるその能力。

原作のヒロインの一人で、この学園都市に七人しかいない（八人目は響だが、これはまだ知れ渡っていない）の第三位。

御坂美琴。

電撃使いの頂点のその少女はズカズカと支部に入つてみると、響たちのいる場で立ち止まつた。

少女は集まりの中に、響の姿を確認すると軽く目を動かした。

自己紹介の切り出し方をほんの反射的に考えだした仕草に気がついた自称露払いは、横から丁寧に一人の間に立つて説明を始める。

「お姉さま、説明しますの。こちらは昨日話した天王寺響さんです。そして、響さん、こちらがかかる有名な常盤台中学が誇る最強無敵の電撃姫、御坂美琴お姉さまですわ！」

(・・・説明の差がすじくつてよ)

白井の紹介を互いに受けた響と御坂はお互い正面から向かいあい、笑みを浮かべると

「へへ。アンタがこの街に来て何もわからない状態で湾内さんを助けたヒーローさん？聞いた時には驚いたわ。後輩を助けてくれてありがとう、私は御坂美琴。よろしくね」

「結局俺も白井に助けられたんだけど・・・。俺は天王寺響。こちらじゃよろしくな！」

「そりや、今日能力開発受けたんだっけ？懐かしいな。不思議な感じじゃなかつた？アレ？」

「そりそり、お姉さま。それについてなんですけど響さん、凄いん

ですの。だつて 「

第七学区のある広場のベンチにて、響と初春はクレープを片手に休憩していた。

クレープにかぶりつきながら、一人は会話する。

「いや～それにしても、橘先輩、怖かつたですね～・・・。私はアレを久しぶりに見ちゃいましたよ」

「俺たちだけでも逃げられて良かつた・・・。白井はともかく、佐天には悪いことしたな」

「やうですね・・・」

二人がここにいる理由はとても簡単で、支部から逃げるようにパトロールを申し出て逃げてきたといふところだ。

逃げる理由としては、先ほど白井『響が超能力者であること』<sup>レベル5</sup>を御坂に話してしまい、そのせいかどこかソワソワし始めた御坂に、藍が釘を刺すように説教を始めたことが原因だった。

パソコンで調べていた段階から、外で見回りを行わなければならぬことは決まっていたので別に問題はないのだが、うまくその話に乗れなかつた佐天は支部に置き去りにされている状態だ。

(どうしましょうか？私、男の人と一人で食事するの初めてだから・えっと！？何を話せばいいんでしょうか！？)

「なあ、さつから顔赤いけど、ビーフしたんだ？体調悪いのか？」

「えッ！いや、違います違いますよ！私はこの通ーりーーの花のように元気ですっ！」

基本的に佐天や白井といった同年代か同性とずっと一緒に居る初春は、響みたいな人間相手でも少しなれるのに時間がかかるらしい。だが、響は逆に誰にでも接するのになれている（橘藍の影響は大）ので誰かと一人きり、という状況を意識したことがない。

頭の上に？マークを浮かべる響を前にガツツポーズする初春。

一連の初春の反応や動きに、小動物のような感じを覚える響。

「そつか、初春が風邪になると運動してその頭の花が枯れ落ちるんだつたな・・・ほ！」

掛け声とともに初春の頭の花飾りに手を伸ばす響。

初春は頭に手をのせ、頭を守りながら

「運動しませんし枯れませんよー？ってクレープ食べるの早いです！まだ私半分も食べてないじゃないですか！？」

「調査しているはずがクレープ食べるなんてばれたらまずいからな。味わいながらも急いだんだ」

「なら、すぐに食べますー待つてくださいー！」

「いや！？俺はそんなつもりでいたんじゃー！？」

「…………ふぐつー？ふがふがつー？」

半分以上残っているクレープを口にほり込んだためか、のどにクレープがつまり苦しそうに胸を叩く初春。

涙目で苦しそうにもがいでいる初春の背中を苦笑いのまま響ははひすつてやる。

「おいー！？クレープで喉つめるなんて初めて見るぞー！」

ようやく飲み込めたことに安心した響はほほとした様子で息をもらす。

一方、クレープとの格闘を終えた初春は、未だ潤っている田で響を見上げると

「あっがとうござります・・・」

恥ずかしいのか、拗ねたようにそっぽをむく初春。

なれない状況でもあるせいか、やけに滅茶苦茶な自分の行動につぶたえているだけでもあるのだが響がそれに気付くことはない。

響と自分の座つている間に置いていた缶ジュースの蓋を開けると、初春はそれに口をつけて一息つき、響に話しかける。

「……響さんって凄いですよねー・・・」

「は？ なんですか？」

「いや、だつて、響さんはこの街に来て右も左もわからないのに湾内さんを助けたじゃないですか？」

何処かついでやましぬづく初春を前に、響は苦笑といった様子で

「……いや、違う白井が助けたんだ。俺は何も出来てないぞ」

「いえ……響さんがないなかつたら湾内さん、危なかつたですよ。私なんか風紀委員なのに、白井さんのサポートに回るくらいしか出来なくて……」

「……へりいしか、じゃないだろ？」

「いえ、私は皆さんみたいに現場では活躍できませんし……」

言葉の後、初春は下を向いて黙ってしまった。

原作知識のある響は初春がこのことについて気にしている理由を、知っている。

彼女は風紀委員の中でも

その年齢に見合わぬコンピューター等に関する技術に恵まれているが、現場で動こうにも体力があるほうではない。

そうなれば裏方から現場の者を支えることが、彼女の才能をもつとも發揮できる場となる。

しかし彼女も中学一年生で風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>とに務めるほど人を助けたいといつ気持ちは大きい。

事件がおきている現場に直行し、すぐに事件を解決したいという衝動が何度も湧き上がったのだろうか？

自分はサポートにしか回れないと自覚している初春は、現場で人を助けることに対して特別な感情を持っているのかもしれない。

そんなことを考えながら響はベンチの真横にある自動販売機でジュースを買つ。

缶にはヤシの実サイダーと表記されているが、今それは関係ないだろつ。

「初春……俺は凄いと思つぞ？」

「え？」

「そのサポートに白井は守られてるんだよ。 そつだろ？ あれだけ動き回つてる白井が大怪我しないのも、より早く困つている人もとに助けに行けるのも、被害が最小限に収まることも、全部お前の成果じゃないのか？」

「……」

響は別にお世辞でも、慰めるために言つてゐるつもりはなかつた。

ただの本心。

真実、思つたことを口にしただけに過ぎない。

「お前のソレは、現場にも、それよりもっと広い範囲に働いてるんだ。だから俺は、十分胸張つていいことだと思つ」

「響さん・・・」

そこで、柔らかな笑みを初春は見せた。

その笑みを見て、響はいじわるそとに笑いながら初春の顔を見て言う。

「それはさうと、せつきから頬に生クリームついたままなんだけどさ?」

「ふえッ! ?えつ! ?」

ボンッ! という音がしせうなくらいの勢いで初春の顔が真っ赤になつた。

顔から湯気が上がついていても違和感がない光景なのだが、初春は混乱しているのかあわわわわ・・、などととりあえず慌てていふような素振りを見せる。

響から顔を背けると、頬についた生クリームをふき取り、恥ずかしそうにひざに向き直る。

「どう、とれましたか？」

「いや、まだ頭の上に花がついてる。取ったほうがいいじゃないか？」

「そうですね～・・・ってこれは違います！？」

再び頭に乗せてある花飾りを守るように手で覆いながら、初春はつ込みを入れた。

その反応に冗談[冗談と笑つてみせた響は、ベンチに腰をかけたままの初春を前に缶ジュースを飲み干し言つ。

「さー休憩はこれくらいしどきますか」

「・・・・・う、ー・・・・づかれたあ・・・・」

明るい真夏の日差しの中、御坂は第七学区をアテもなくフラフラと徘徊していた。

あれからというもの、藍の説教でこつてり絞られた御坂は調査をすると言つた白井と疲れたから支部に残ると言つた佐天の二人を置いて、気分転換にも街を出歩いていた。

御坂から見て、橘藍という人物は先輩にあたり、頼りになる上優しくいつでも冷静な節がある人物だ。

だが、正直怒ると怖い。

反論が全く出来なくなると言つてもいい。

「でも、能力を使つべら」、いいじゃない・・・」

弱々しく呟いたのは、万が一でも藍に聞かれたらまずいからだろ。」

（そう言えども、橋先輩の能力を私はほとんど見たことないわね・・・）

正確には数回あるのだが、御坂は彼女の能力をほとんど見たことはなかつた。

事件が起きた時の現場では、基本的に橋藍は女の子らしい体つきにも関わらず体術などで済ませてきた。

いつでも落ち着いた様子で、荒々しく感じさせない動きだったのを御坂は覚えていた。

彼女が一年前に転生してきた、転生者という事実は藍本人と響以外知らないし、まず理解自体できない。

事件の時でも藍は『田の前を見ていらないんだ』と御坂は感じた。

まるで、つい最近まではほとんどのことに関心を持つていなかつたようにも見えた。

だが、今は前よりも生き生きとした田になつてゐる・・・『がする。

そんな先輩に先ほどまでこいつてり絞られた御坂なのだが・・・。

(・・・いやそりなら、バレないわよね?)

やはり性格は簡単には変えられない。

御坂は街を徘徊しながらも、響を探すことにする。

(まあ、向こうの能力の練習を兼ねてついてことでいいわよね?)

能力開発を受けたばかりの響を能力に慣れさせることにもなるだろう、と御坂は考える。

別に『あの馬鹿』のように強引に追い掛け回す気はないのだが、一度くらいなら向こうも男子だし勝負事には乗ってくるだらうもと御坂は考えていた。

(よし!なんかやる気出てきたわ!)

再び活力を取り戻した御坂は、いつも通りの歩き方に戻り

「よっしゃー!かかつて来んかいおんどりやあー」

変なテンションのまま響の探索を始めた。

(・・・何か・・・嫌な予感がする)

「どうしたんですかー？響ちゃん？」

「いや、なんでもない」

一瞬だけ顔を青ざめていた響に、気になつた初春は声をかけた。

だが、響はハツ、と我にかえると大丈夫大丈夫、といったよつて手で表現しながら足を進めた。

初春と響の二人は今、原作であるセブンスミストの周辺を歩いていた。

このあたりは学生が住んでいる寮よりも、高層ビルが多く住宅街というよりはまさしく都心部という表現が似合つている場所だった。

あらゆる学区に接している第七学区だからこそ、少し歩くだけで街並みが変わるくらいの側面を持っている。

そのことに感動しながらも響は周囲を見回しつづく。

「今起きてる事件つて、結構ニュースになつてる連続虚空爆破事件（クラビート）  
？ええっとアルミを・・・何だっけ？」

「はい。能力でアルミを基点に重力子を加速、それから周囲に放出させてアルミを爆弾のようにしている・・とのことなんんですけど・・・」

「けど？」

「該当者がいないんです。あの威力を出せる人物は大能力者の一人レベル4

だけしかいないんですけど、彼女には確実なアリバイがありますし・  
・

「なるほどな」

原作知識を持つ響は犯人を知っている。

その簡単に見つからない理由も、動機も。

しかし彼には今、その犯人を捕まえる術がなかつた。

一つ目はストレートな理由だが、まず証拠がない。

二つ目は、被害の状況悪化の心配。

彼の性格からするに、二つ目は彼自身の関わり方では理由にすらならないわけなのだが、どこか心の隅で転生したことを実感していないう部分があるようだ。

（だけど、今の俺にはここが現実で向こうが架空の世界・・・いい加減慣れないとな）

「あれ？ あそこに入集まつてなすけど、何でしょう？」

しばらく歩いていた一人だが、初春は道の隅に何か見つけたのか、指をさしながら呟くように響に尋ねた。

響も釣られたようにそちらを見たのだが、すぐに苦笑いになつた。

流石に今度は個性的とは思えないほど、柄の悪そうな集団が臆病そ

うな少年を囲んでいてそのうちの一人が少年の胸倉を掴んでいるからだ。

正真正銘、どこから見てもカツアゲだ。

「初春、見るからにカツアゲ。って多くないか！？俺の前居た所でも流石にこんなにあからさまなのなかつたぞ！？」

「そうですね～。そこまで多いとは思いませんけど、やっぱり外よりはハジける学生が多いんでしょうか？響さん」とつては昨日の今日じゃないですか？」

「なあ俺のHンカウント率が高いのかな？」

「そんなことよりも、助けないと不味いですよ」

「・・・」

しかし返答はない。

「響さん？」

「ヤツジメン」

風紀委員の腕章を付けながら初春が振り返ると、すでに自分の横には響の姿はなく・・・

「おー、離してやれよ

昨日と同じように、不良の集まりの中にズカズカと入っていく響の姿があった。

視点変更・響視点

俺こと、天王寺響は不良の集団に睨まれていた。

人数は昨日よりは少なく、七人程度。

だがどいつも畠田（転生当田）見たようなアリラとは違い、正真正銘のチノピラぐりいだ。

一人一人、そこまで体格はよくない。

当然、今までこっちの世界に住んでいたわけではないから能力があるても実感はなく、不安なのは変わらない。

そんな俺の前に、絡まれている少年の胸倉を掴んでいた髪型がオーバーバックの不良が手を離してこちらに少し歩み寄ると

「カツコおいー。ヒーローみたーい。だけど・・なあ?俺たち、コイツが金かしてくれるっていうから借りてただけだつて」

ハハッ そうそう、などという言葉が周囲から飛んでくる中、オールバックは下品に俺の前で笑って見せた。

「つい、つい雰囲気はたまにだが転生前も見られた感じの悪い雰囲気だ。

あまり好きにはなれない。

そして、オールバックは右手をかざしてその上に大きな火の球体をつくり上げると得意げな顔になり

「俺は強能力者だぜ？ 尻尾巻いて逃げるなら今のレベル<sup>3</sup>だ」

俺に向かって警告するかのように徐々に掌の炎を拡大させていく。

音を立てて広がっていく炎に俺は息をのむ。

（能力ツ・・・）

俺は正直、能力を適切に使える自身が全くない。

剛速球が投げられる」と野球の試合で投げるのは全くの別問題だ。

（そう言えば、原作では黄泉川愛穂はレベル3ぐらいまでなら素手で倒せるんだったな）

だけどそれは、能力者と戦うことに慣れているし訓練で鍛えられた人間だからこそ出来ることで、喧嘩慣れすらしていない俺には出来ない芸当だ。

「・・・クソッたれ！逃げるわけないだろ」

「へえ、逃げないか。なら！真っ黒焦げになりやがれ！！」

「ツー？」

俺の目の前にいたオールバックの掌から炎が溢れ出すよつに広がっていく。

赤い赤い未だ現実感を俺に与えないソレは、オールバックが右腕を振るう動作とともに、俺に一直線に飛んでくる。

炎は速く、俺を焦らせる。

赤いソレは身の危険を感じさせるには十分な威力だった。

脅威を感じた俺は、気がつけばすでに脳内で演算を行っていた。

バキイイツー！と

俺の目の前に俺より一回り小さな氷の塊が突如出現する。

それはあまりにも純度の高い氷で 炎をものともせずに受けきつてしまつた。

氷にあたり、火の粉となつて飛散する炎を見ながら俺は冷静さを取り戻す。

「強能力者……って言ったな。やつてくれるじゃねえか」<sup>レベル3</sup>

「なんだッ！？今のアレを防いだ！？氷で！？お前は一体！？」

「一般人だよ。空气中に含まれる窒素の『構成を組み替えて』固体の状態へ変化させたんだ」

そう言いつつ俺はオールバックが慌てて撃つた一発目を今度は地面から水を吹き上げさせて作った柱を発生させて防ぐ。

「ツー？ 水だとツー？ がツー！？」

驚いていたオールバックの顔面を俺は思いっきり殴りつけた。

喧嘩にも慣れていない素人の拳だ。上条さんのように気絶させるまでには到底及ばない。

慣れない骨と肉の感触に、不快感を感じた。

オールバックも驚いていた隙を突かれたために反応が出来ずそのままヨロヨロと不安定な体勢のまま後に下がる。

「くそつー！いい加減にしゃがれ……」

焦るオールバックを前に不良たちはいつせいに能力を使用するような体勢になるが、俺は確かな手ごたえを感じつつ演算の時の感覚を覚えるように思い出す。

オールバッカは仲間を見て、多対一の状況に余裕を持ったのか口をひらく。

「ははは！調子に乗るからだ！ヒーロー気取りのガキめ！いぐらお前が氷操る能力者でも！　これなら！－！」

「－」

オールバッカが叫んだ瞬間、オールバッカを含む全員が何かしらの能力を使用し電気やら水やら火を飛ばしてくる。

「ははは！－後悔しな！－」

「一つ間違つてゐな。俺はそんな能力じやない」

声を発すると同時に、俺はアスファルトの地面を思いつきり蹴り付けた。

靴底と地面がこすれる乾いた音がすると同時に、アスファルトの装甲が粘土のように、生き物のように、地面から生えるように盛り上がり、俺を守る形で壁を形成した。

分厚いアスファルトの壁は周囲からの攻撃と相殺し、ボロボロと音を立てて砕け散った。

俺自身も初めて目にする奇妙な光景に、不良たちは口をあんぐり開けている。

だが、不良たちも馬鹿ではない。

オールバックが再び合図を送ると、周囲の不良たちが再び能力を運用するべく構える。

「ぐつ・ぐつ・どんな能力なのは全くわからねえが、数ではこっちが上！防戦一方の奴に恐れることなんざねえ！波状攻撃で攻撃し続けてやるうじやねえか！！」

（・・・これはどう攻撃に使えば・・チツわからねえ！）

俺の能力はレベルが高いとはいえ、手加減と使用方法が難しい能力だ。

高密度エネルギーなんて暗部じあるまいし、ガンガン撃つ気はないし、氷や水を操るには『組み換え』作業という脳への負荷が大きい作業をしなければならないので防戦一方は厳しい。

俺も一応電撃が出せるが、（人に放つことに慣れている）御坂ほど細かく制御出来る自信がない。

（うつわー。これなら電撃使いのほうがマシじゃねえか！！<sup>ハレクトロマスター</sup>）

俺がどう対応しようか迷った瞬間、不良の集団の外側から声が聞こえた。

「ちよろっと、アンタたち」

「 「 」 」

確かに、この声は先ほど初めて生で聞いた声で、生でないなら結構聞き覚えのある、間違えはしない声。

そう、俺の記憶にまだ新しい、電撃姫の声。

「 私の友達に、手、出してんじゃないわよつ……」

刹那、俺の周囲、正面にいた不良が能力ごとの確に雷撃の槍で撃ち抜かれた。

その際に広がった余波は強く、ビリビリと俺の肌を叩く。

俺は思わず衝撃に目をつぶりそうになつたが、物が倒れるような音とともに力なく真っ黒焦げになつた不良たち全員が崩れ落ちる。

安心したのか、自然と息をもらした俺は背後から誰かが歩いてくるのがわかつた。

ゆっくりとした足取りに俺は振り返りながら、笑う。

「 全く、アンタも随分とお人好しよね

俺の振り返った先、そこには 御坂美琴が呆れた様子の顔で立つ

ていた。

### 視点変更・通常視点

「御坂・・か。ありがとうな。助かつた」

「礼はいいわ。全く、アンタも何考えてんだか・・・」

「もうですよー響さん。横見たらいなくなってるんですから、私が  
びっくりしちゃいましたよ」

呆れたようにため息をつく御坂と初春を前に、響は申し訳なさそう  
に頭に手をやつて目を一人から逸らしていた。

場所も移動し、ここは原作における上条当麻と神裂火織が交戦する  
ことになる交差点。

時刻的にも夕方なのだが、夏のためまだあたりは明るく、たくさん  
の人が道を行き来しており、巨大なデパートやショッピングモール  
を四方で結んでいる歩道橋も人であふれている。

今からセールの店もあるのか、その賑わいが消える様子はまだ見ら  
れない。

「つーむ、それにしてもこの街は新鮮な感じでいいよな~」

「確かにね。私が来たのは小さい頃だったけど、同じように思った  
ことは今でもはっきり覚えてるわよ?」

「御坂さんもですかー！？実は私も結構鮮明に覚えてるんですよ！」

「へえー。それって急に『SF小説であるよつた御伽噺のよつた世界に来た！まるでお姫様みたい！』って感動だつたりするのか？」

「わうそーーそんな感じですよーーあー今、響さんも同じよつて感動していくんだじょーー？？そうじょーー？？そうですよねーー？」

やけにテンションが高く、目を輝かせながら近づいてくる初春に一瞬疑問を感じた響だが、ここで原作知識が大活躍。

初春のテンションが高い理由を即座に先ほど自分が発した言葉と特定するのに、一秒もからなかつた。

(お姫様？・・・まあ、お嬢様と近いからか)

手で初春を制しながら響は答える。

「ま、まあそんなところだ。男の子としちゃあ、冒険気分つてところか？（転生してきた俺に）どうちゃあ少しオカルトティストな感動もあつたけど・・・」

「わかるわかる、男の子つてそういうの好きそうだもんねー」

「ううん、と頷く御坂に初春もううですよーと同意する。

御坂を見ていた響は御坂を見て何か思ったのか、一瞬思いついたような感じになると御坂に向かつて尋ねる。

「なあ、御坂。さつきどつして御坂はあの場所にいたんだ？藍や白井や佐天も一緒にないみたいだし……」

「うーーんうよアンタ……」

「うーーんうーー？」

突然叫びだした御坂にビクウツーと驚きながら、響は御坂がうつろついていた理由に気づく。

初春は頭の上にマークを浮かべてしまつていて、周囲の人も何事かと一人に注目していた。

響が何か言葉を発する前に、御坂は好戦的な笑みで響を指差し言い放つ。

「私と勝負しなさいーー！」

「だが断るーー！」

「即答ーー?いや、勝負しなきことーー。」

「なんですか。もしそれが藍にばれたらどうあるんだよ?」

「うーーんうーーんで、でもバレなければ・・・」

オロオロしながらでも勝負を申し込んでくる御坂を前に、響はただ呆れる」としか出来なかつた。

この世界には一年前から橘藍という存在が世界に介入してきた。

別段、目立ったことはしていない（らしい）が御坂が響に対し、上条のように扱えないのは藍の怖さがあるからだらう。

・・・アイツ、怒つたら怖いからな・・・。

「あ、仕方ない・・・」

「！？」

困った奴だ、とでも言い出しそうな気だるい感じのまま響は返答する。

「勝負、受けてやる」

## 第二話・saunter（後書き）

能力のレベル大きいのに弱つちい主人公ですねw  
まあ、今は慣れていないことを目立たせたかったわけです。  
あと一、二話すれば原作のほうへ入っていきたいと思っています。  
しばしお待ちを・・・

さあ週はいよいよ、御坂VS響の一騎打ちです！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2863z/>

---

とある転生の原子操作（メルトオペレーション）

2011年12月20日17時50分発行